

幼児期における協調性を育てるための 集団遊びの保育実践

○岡本京子

(神石高原町立保育所)

玉木健弘

(武庫川女子大学文学部)

問 題

保育所保育指針(2008)によると、5歳児の姿として、「言葉によって共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える。さらに遊びを発展させ、楽しむために、自分たちで決まりを作ったりする。また自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、喧嘩を自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり異なる思いや考えを認めたりといった社会生活に必要な基本的な力を身につけていく」とされている。

このように、5歳児は、集団の中で友達と関わりを持って生活することができる。しかし、集団生活の中で、他児との意思疎通がうまくいかず、自己中心的な行動が多く、他児と協調する姿も見られないことがある。そこで、本研究では、集団活動を身につけるため、集団遊びを通して幼児達の行動変容を促す保育実践を検討した。

方 法

調査対象児: 公立保育所に通所する5歳児6名(男子5名、女子1名)を対象に研究を実施した。対象児は同じクラスの5歳児である。

対象児のクラスについて: 5歳児のみで活動する時間や制作活動に対して興味を持つことは出来るクラスである。しかし、実際のルールのある活動などでは、集中して取り組むことが難しく、雑でも早く終わらせる方が良いという幼児が多い。集団遊びは、自分のやりたいことは主張するが、他児の思いを聞くことができない。そのため、トラブルも発生しやすく、集団活動が苦手なクラスである。

保育実践: 本研究は、「十字鬼」を用いて保育実践を行った。十字鬼はルールが明確で幼児にも理解しやすく、体力の差があっても幼児たちの興味・関心が引き出しやすいと考え今回の活動に採用した。

実施時期: X年5月および6月に3回実施した。

結果および考察

グループ分けの基準: グループ分けの基準として

は、①月齢、②コミュニケーション能力、③自己コントロール能力の3つをもとに分類した。②のコミュニケーション能力として、他児の話聞く、他児と話しが出来る能力とした。また、自己コントロール能力は、自分の気持ちを抑えることができる能力とした。なお、②と③は普段の保育場面で見られる姿をもとにした。

保育実践における活動の変化: 第1回の活動では、「鬼にタッチされた外に出る」というルールで実施した。タッチされたかどうかの判断は、幼児達が行った。その結果、「タッチをされた、タッチをされていない」の判断がつきにくく、活動が止まることがしばしば見られた。

そのため、第2回の活動では、タッチではなく、ハンドタオルのようなものを「しっぽ」として付け、「しっぽを取られたら外に出る」というルールで活動を実施した。その結果、幼児一人一人が活動のルールを理解しやすくなり、活動が途中で止まることもなくなった。また、活動終了後に活動の感想を尋ねたところ、「楽しかった」、「またやりたい」といった感想が多く聞かれた。このことから、ルールを分かりやすくすることで、活動を楽しむことができ、集団活動の楽しさやひとり遊びとは違った魅力を感じさせる事ができたと考える。

第3回の活動でも、しっぽを着用して活動を行ったところ、第2回の活動より幼児達の動きがよくなった。また、これまで、集団活動に参加しにくかった幼児もこれまでとは違う動きが見られ、活動にも参加していた。このことから、活動の内容やルールが理解できると、幼児の活動に対する意欲を向上させる事が示唆された。

今回の実践を通して、集団での活動を楽しむことが増えただけでなく、日常生活の中でも幼児同士で協力して物事を行う回数が多く見られるようになった。このことから、「ルールを覚えさせる」方法を検討するだけでなく、「活動を楽しむ」方法もさらに検討していくことが、幼児の協調性を育むためには必要だと考える。